

たかが川柳されど川柳（十三）

上野 一彦

シルバー川柳考

本シリーズも十三回を数える。恩師、故三木安正先生は学会での論文など、毎年連続してナンバーを振る発表は格好が悪いと注意された言葉が脳裏を過る。團伊久磨のエッセイ集「パイプの煙」のような連続ものならナンバーをつけてもよいのだが、私もどこかで一度卒業したほうがよさそう。

歳をとると厚顔無恥になるとの自覚はあるものの、それでもとうの昔に作家の夢も捨てた身ではあるが、せめて物書きの端くれ「エッセイスト」を名乗る夢は捨てきれないし、それは最後の夢でもある。出入りの税理士が職業欄に「無職」では格好がつかないので何にしましょうとい

う。「年金生活者」でもいいのだが、わずかな借家の収入を盾に「不動産貸付業」はあまりにも大それた所業。イメージ悪過ぎ、思い切り恥を忍んで、「私の夢はエッセイスト、または川柳作家」と独りつぶやいたら、「生業にもなっていないものは無理でしょう」とあっさり切り捨てられた。

下手な川柳、同人を良いことに、お情けで載せてはきたが、そろそろ記録は記録、勝手に日記に書いておいてといわれそうである。目下、川柳の先輩でもある長年の友、そしてライバル、晃彦氏とともに、放送関係、心理学関係、出版社関係の諸氏と「多年草」川柳同人を成し発表の場としている。正に言葉と心を生業にしてきた人々の集団であ

る。数年前から、さらにNHKのアナウンサー出身の方がちが作られた由緒ある「だんだん」（前身「NHKばらばら」）にもお恐れながら参加を許された。こちらあたりが私にとって精一杯の主戦場で、討ち死にしないように日々精進しているわけである。

川柳といえば、堤丁玄坊の教科書には、その極意を「ズバリ斬る、ホロリ泣かせる、チクリ刺す、ニンマリ笑う、ポンと膝打つ」とあるが、これは「NHKばらばら」の創始者でもあった、私の幻の師、大木俊秀先生の言葉と聞く。件の晃彦氏は、ダジャレや進歩のないサラリーマン川柳を嫌う。われわれが目指すのは、わび住いであろうとも、どんなに狭かろうと、その部屋に掲げる額縁に入れておきたいような一句である。彼の言葉を借りれば、川柳の評価も「ただ単に、私も同感！あるある！だけといった一瞬の感覚で評価しないで、句を深く読み、人間性に辿りついた句を高く評価することが大切。深みと永遠という視点、別の言葉で言えば文芸として『額縁級』かどうかの評価をすることによって、川柳は、単に、いつときの軽い笑いを誘う遊びの域を脱していくのではないか。」ということになる。大木先生はこうも言っている。①わかること。②五七五であること、特に中七と下五は厳守すること。③何かが、ど

こかが新しいこと。その他「形容詞を安易に使わない」、これらが最初に教えられることである。

さて、NHK学園に川柳講座を創設されたこの大木俊秀さんの流れをくむ川柳集団「NHKばらばら」は「だんだん」という名で活動を続けてきたのだが、この度、全日本川柳協会（日川協）傘下の「ばらばらⅡ」（代表 岡部晃彦）と改称して新たな活動を継続していくことになった。新しい時代の到来である。改称にはこれまでの大木精神の継続の意もある。同時に、岡部氏と共に十年、川柳同好会として活動してきた「多年草」も「ばらばらⅡ」の弟分として、新たなステージへと踏み出すことになった。

最近「ばらばらⅡ」に代わる直前の「だんだん」（この後、記載）で、次の句が最優秀の荣誉に浴するという光栄かつ稀有な体験をした。

マンションの鍵締め一人入院す

ちょうど一年前、何気なく受けた内視鏡検査で下行く腸にポリープが見つかった。その場では無理なので後日入院をして内視鏡による剥離手術を受けることになった。入院など、若い頃酔っぱらって自転車で電柱に激突、鎖骨を折ったのだが頭もついでに打ち、救急車で運ばれて以来のこと、ついに年貢の納め時かと素直に老境に（いや自覚が

遅れていたけなのだが) 入った気がした。

身の回りのことなど何でも自分でする習慣のある私は、一週間の海外旅行風に、いつものように下着やパジャマを大ぶりのバッグに詰め、仕事のある家内に、「一人で大丈夫だよ」と強がって見せた。その強気の裏を見透かされ、彼女はちゃんと休みを取り、入院に付き合ってくれたのだが、ふとどちらか独りになったらと、ベッドの上での有り余る時間に想像を膨らませて詠んだ句である。

十一人のメンバーのうち四人の方が最優秀句に、二人の方が優秀句に選んでくれた。

* だれも身寄りのない高齢者の孤独感が、身につまされるほど伝わってきます。事実を形容詞無しで、客観的に描くことの大切さを教えてくれる名句です。(晃彦)

* 何に対しても冷静に一人で対処しているであろうこの方の力強さを感じました。また、どのような境遇なのかといろいろ想像してしまいます。(老郎)

* これからはどこにでもありそうな光景を、さらりと句にしている、それだけに怖さと切なさがこみ上げてくる。見事な秀句だ。(達昭)

* 身近なところにも独居老人が増えています。そして、鍵がかかったまま空き家になる。近所に空き家も増えまし

た。(進彦)

短評は原則的に最優秀句にしか付さないで、思いもかけぬ高評価であった。私にすればまさに盆と正月と一緒に来た怒涛の感激だった。有頂天は続かぬものと知りつつも素直に喜び精進をさらに誓っている。その後、この句の出来上がるまでを何度か振り返ってみた。決して成りすましではなく実体験がベースにあることの大切さを改めて実感する。

ところで「マンション」がいいのか「アパート」がいいのか。「鍵を締める」がいいのか「鍵を閉める」がいいのか。「一人」がいいのか「独り」がいいのか、はたまた「ひとり」なのか。結構いくつもの分岐点があり、何が正解かはわからない。そこが推敲することの楽しさでもある。こんな風に考え出すといくら時間があっても足りなくなる。川柳の醍醐味なぞというと言い過ぎか。

歳のせいもありどうしてもシルバー川柳が多くなる。どちらかといえば、老いを笑い飛ばし、川柳の醍醐味をさらに味わい尽くしたいと思う。川柳は人間を読む文芸という先人の言葉を噛み締めつつ、いい句は絵になる、いい句は余韻があるとつぶやきながら、肩書のない名刺に「川柳子 上野 和」なぞとそつと書いてみる厚かましい私である。

癌と私

入院騒動の続きの話である。これだけ大きいポリープは癌化しているでしょうと、二人の医者からあっさり言われた。青天の霹靂、曇天のテポドンじゃないが、ついにその日が来たというか、衝撃が走った。ここ数年、親しい友人を何人か癌で突然奪われた経験が現実感を伴いわが身に押し寄せてきた。定年後、良い友に恵まれ、トレッキングとか野の花の名も見様見真似、聞き様聞き真似で結構知るところとなり、月一の植物同好会の活動も結構な生きがいとなつている。七十過ぎて週何回かのスイミングなど、健康だけが取り柄だった私なのに、ここところ、職場での親友H氏、学生時代からの仲間N氏など、相次いで親しい友人を癌で亡くしてきた。自分は無縁と思っていた癌がいつにわが身にも降りかかってきた。

ていねいに癌という字を書いてみる

振り返ると、わずか一週間とはいえ貴重な体験でもあった。入院前、数年前に入った何種類かの保険会社に連絡し、「癌になったら〇〇万円」なる保険の請求書類も取り寄せた上での入院である。

【入院日誌】

五月旧9日(水) 九時入院。十二時医師(消化器内科主治医/担当医)から説明を受ける。主治医と担当医がいるのだが、主治医は四十台の冗談の通じるイケメンの先生。担当の先生は研修中で石田ひかり似の可愛い女医さんで、なんと名前も「ひかり」。手術は、内視鏡的粘膜下層剥離術(Endoscopic submucosal dissection: ESD)という難しい名前だが、医療の進歩は素晴らしい。内視鏡でのポリープ除去というわけにはいかなかったが、切ったり貼ったりせずに内視鏡を見ながら、腸膜と患部の間にヒアルロン酸を注入、1mm単位で剥離するという。医者に言わせると簡単なもので、若い主治医はそのベテランだという。

五月十日(木) 六時下剤の開始(二時間で十分おきに計二回)、内視鏡検査でこれが一番つらい)、八時完了確認、十時点滴開始。十四時三十分手術開始。十六時三十分無事終了。経過も順調。いわゆるポリープが発達し腺腫化したものを電気メスで剥離する手術で、癌化しているかどうかは組織検査しなければわかりませんといわれる。二時間かかったが、想定内で終わった模様。四十mm弱とかなり大きく、経過は傷口の回復如何とのこと、安静。手術前は得体の知れぬもの抱え、予想以上の悪化など様々脳裏をよぎつ

たが終わってみれば、ある種の安堵とすっきり感あり。

五月十一日(金)八時三十分ひかり先生回診。九時十五分主治医診察、六階の歩行許可。十二時血糖値とインシュリンの測定。十四時レントゲン撮影。

病院はわが家からは至近距離、ガーデンプレイスとは線路を挟んで反対側だが、病院からの眺めは普段の居間からの景色とさして変わらない。かつて両親も入院したことがあり、我々夫婦も緊急外来で利用した経験のある馴染みの病院。近くの日赤、都立広尾、通信病院等の大きな病院よりも家内の負担を考え選んだ。

朝夕のひかり先生の回診は、毎日覗きに来る家内と同様、楽しみかつ心待ち。とはいえ、尻丸出しで内視鏡突っ込まれた無様な姿見られるのだから、なんともはや・・・。

術後の痛みもお腹の張りもなく、すっきりと快調。下剤をかけると腹の中も真っ白な善人になったような快感さえある。点滴をしたまま二十四時間ベッドで安静というのは、普段、注意欠如多動性症候群(ADHD)気味の私には何ともつらい体験なはずだが、初めはこんなによく眠れるものだと、まさに静養パラダイス。

普段入院などしたことがないので千載一遇の稀有な体験と、ジャック・ニコルソンとモーガン・フリーマンの映画

「最高の人生の見つけ方」の冒頭のシーンよろしく、四人部屋でもよかったのだがわざわざ二人部屋を選んだ。残念ながら、幸か不幸か、隣はずっと空き状態なのでイヤホン無しでのうのうとテレビのつけっ放しの見放題。その後の経過もすこぶるよく、予定より一日早く点滴台をつけたまま、洗顔、トイレの使用許可もでた。

この調子なら明日から流動食、でも点滴が外れるのは明日以降とのこと。血便なければ傷口の回復良好の兆し。なんとかかそうなることを念じ、またベッドでじっとしている。

この機会に少しでも精進と囲碁の秘本も持込んだが、手にしても活字は全く目に入らない。スマホの他に仕事用のPCも持参したが触れる気もしない。川柳もヒマ過ぎて句想も浮かばず、朝夕に、顔を出す家内と回診のひかり先生の来訪を楽しみにただただ惰眠。

五月十二日(土)八時三十分ひかり先生、九時三十分主治医回診。経過順調。朝のひかり先生回診時、身体触られ、脈取られ、「お腹痛くないですか」と押すので「うっ！」と冗談でやったら、「緊張するじゃないですか」とお叱り。そのうち、窓の外に放り出されそう。昼から重湯。点滴は明日まで。

五月十三日(日)三分粥。点滴終了(午前五時)

五月十四日(月)ひかり先生、主治医回診。昼五分粥。薬剤師と打ち合せ。

五月十五日(火)ひかり先生、主治医回診。消化器内科、糖尿外来、相談の結果、糖尿対策をよく理解した上でヘモグロビンA1Cの値が確実に下げることのお達し。薬は補助手段にすぎないと返答無用の厳重注意。二週間分薬処方。十時理容室予約。十七時主治医の最終回診と説明。顕微鏡検査の結果、幸い組織は癌化してなかった(なんとという悪運の強さ)。ということで治療は終了。一年後内視鏡検査するように。十七時薬剤師説明。

五月十六日(水)八時三十分ひかり先生最後の回診。十三時栄養指導の後、退院。

【後日談】

一年後、再来院。内視鏡検査。小さなポリプ発見直ちにとる。一週間後組織検査の結果も白。これから毎年再検査する予定。ひかり先生は研修を終え、再びまみえることなし。小さくともポリプをとったのだから安静と言われたが、三日後には尾瀬ヶ原に出入立。

【おまけ】

それから数カ月。小学校以来の親友、誕生日も一緒にいう分身のような存在のヒロシが、五月に体調不良を訴える。下半身に異常を感じ、歩いたり座ったりもできなくなる。

薬屋を営むが、今は息子に店を任せ、毎月、半分は京都のマンションで、あとの半分は店を手伝うという結構なご身分。六月に入院。直腸癌ステージ四と判明。近くの都立広尾病院で手術。ストマ(人工肛門)をつけることを選択。九時間もの大手術。

毎日のように訪れ、せがまれるままに足などさすってやったが、「お前の時はもつと上手にさすってやるからな」の言葉も反故に、闘病生活二か月であつという間に他界。最期に、これほど濃密な時間を彼の奥さんから分けていただいたことに感謝。まさに燃え尽きるようにあつてなかつた。

隣り合わせに一緒に買った広尾の臨濟宗大徳寺派妙高山東江寺の墓に眠る。

(私の内視鏡経験談を折角話したのに、恥ずかしくてか、最後まで受診してくれなかった。そのことが返す返すも残念。)

たかが川柳 されど川柳 (二〇一九年上半年期)

(川柳同人「多年草」、川柳同人「ばらばらII」)に発表
した拙句を解説付きで載せています。(

一月

だんだん一月(六三三号)

正月は正月用の顔になる

◇新年になると気持ちだけでも引き締まる。馬子にも衣裳
で着物など着ようものならそれだけで顔つきまで変わる。
そんな気持ちを詠みました。

今年こそラストダンスを一緒に

◇あの人と人生最後のダンスを踊るなんていう場面を心
中で想像する年齢になりました。思い出は甘く切なくそし
てはかない。「ご飯の用意できましたよ！」なんて言う声
のからぬうちに。

膝枕してみたくなる雪の夜

◇寒い夜、こんな場面を思い浮かべるだけでも幸せな気分
に浸れます。創作の世界は何と甘美なことか。

題詠「髪」

振りむけば妙にときめく乱れ髪

◇茶髪どころか金髪、紫など乱れるなか、やはりしつとり
とした緑の黒髪、一筋二筋額にかかる乱れ髪、たまらんで
すな、大和男子には。

髪結いの亭主の苦勞退職後

◇待ちに待った定年。まだ仕事を続けてくれるカミさん。
これぞ髪結いの亭主と悦に入っていると、意外にも立ち位
置の変化から様々な気苦勞も生まれる。

内気で私のハートうぶ毛生え

◇巷には心臓に毛の生えた輩は結構多い。そんな中で生き
抜くうち私の心臓にもだんだん毛が生えてきました。でも
産毛なんです。

多年草一月(一一三三号)

一〇〇円で罪消したいと初詣

◇新年の初詣。奮発してお賽銭も千円札、いや百円玉にし
ておこう。でも願ひ事は家内安全から世界平和まで。凶々
しく己が一切の罪まで。神様も大変ですね。

賞味期限私自身がもう切れる

◇賞味期限切れは食品だけじゃありません。後期高齢者と
もなれば人間としての賞味期限はとうの昔に切れています。
さよならの友の握手に熱こもる

◇久しぶりの友との邂逅。健康自慢から病の遍歴自慢まで
そして別れ際、来年また会えるかなと思うと、つい別れの
握手に力が入ってしまいます。

題詠「気」

気合いでは夫婦の勝負ついています

◇夫婦の勝負は新婚一週間とか。いくら立てていただいて
も本当の勝負はついています。女は母を経験し、そしてど
んどん強くなっていきます。どうぞよろしくお願いします
の毎日。

ずるい人その気にさせて逃げないで

◇猫じゃあるまいに、さんざじやらしてその気にさせて。
そういうのずるいですよ。どうせなら、いい人よりもずる
い人といわれたかったな。

やがて来るやる気あってもやれぬ目が

◇まあ、言行不一致というか、だれしも気持ちがあっても
体がついていかぬことだって増えてくるものです。

二月

多年草二月(一一四号)

読んでやる言ってた友の弔辞読む

◇お前の弔辞は俺が読んでやると威勢の良かったあいつが

気がつけば先に逝っちまった。まさかお前の弔辞を俺が読
む羽目になるとは。
毎日が一期一会となっていく
◇茶道だけではありません。高齢者になると一日一日がと
ても大切に思えるのです。一期一会の心境はそれなりの充
実感さえ伴うものです。なんて殊勝なこと言うようになり
ました。

蟻んこになりた日だつてあるんです

◇俺はずいんだと鼓舞しながら生きてきた奴だつて、自
分が象の前の蟻んこのような存在に感じられるそんな日
だつてあるんです。それが人間、なんだか相田みつを風で
すね。

題詠「逃げる」

言つてみたい逃げる女の後追わず

◇こんなかつこいいセリフ一度でいいから素面で言つてみ
たいもんです。逃げられた女は数限りなくあるわけだ。

蠢くよ責任とらず逃げる蟲

◇春になると啓蟄というけれど。国会などでもこんなしよ
うもない蟲がぞろぞろいる気がします。

あのひととおぼる夢での逃避行

◇夢、夢、夢。

三月

だんだん三月(六四号)

マンシヨンの鍵締めひとり入院す

◇最近の作ではよい出来の句。先日、たまたま一週間手術のため入院しました。その日、仕事のある家内を前に、自立している私は、さっさと下着やパジャマをバックに詰め、「いつてきまーす」。結局、家内は休みを取って連れ添ってくれましたが、ふと、独り身なら・・・。マンシヨンがいか、アパートがいか。締めるがいか、閉めるがいか。一人がいか、独りがいか・・・。

馬鹿なふり利口ぶるより難しい

◇利口ぶることは多いが、馬鹿を装うこともないわけじゃない。どっちが難しいかといえば、そりや馬鹿な振りじゃないんですか。

無呼吸症心肺停止のリハーサル

◇睡眠時無呼吸症というのがあるらしい。その映像を見るとついこんな句が思い浮かびます。

題詠「次」

次は無いそう思いつつ時間切れ

◇わかっているんですが先延ばししているうちに本当の時

間切れが来てしまいます。まあ明日でもやろうと思ううちが花ですが。

成人病次権るならぼっくり病

◇さまざまな病気が待っています。理想的な病気は何か。そうなんです。それはぼっくり病。そう願いつつも罹りたくない病の一つでもあります。

次は誰それが気になるクラス会

◇一人、また一人と減っていくクラス会。口には出さないが次は誰かなと思うことはありませんか。

多年草三月(一一五号)

米朝は話しすべって土産なし

◇米朝は落語家。ここではハノイで会ったランプと金。結局準備不足の物別れ。会談不調は話し滑ったわけですね。おかげで双方期待したお土産もなかったというわけ。

統計の衣まとわせし放題

◇統計をお得意の付度、改竄。そして居直り。こんな風潮重苦しい。責任追及も猿芝居。道義的責任という言葉も風化。

前向きに鬱という字を書く修行

◇時期的なものかどうも鬱っぽい日が続く。そんな時、元

気を出して「鬱」なんて言う字を書いてみるのはどうでしょう。

題詠「にやり」

イタズラな風に思わずニヤリとす

◇マリリンモンローじゃないが、思わぬ突風に心和む男心を詠みました。おやじのかつらが飛んでお笑いになるご婦人もあるかも。

両首脳ニヤリひやりの読み違い

◇これもハノイ会談のこと。互いに心の中でニヤリとの思惑で臨みましたが、結果は思いがけない決裂、お互いにひやり、これでノーベル平和賞なんて言う図々しい思惑も消し飛びましたが世界平和にとっては大ヒヤリです。

にやりこそ男ごころの底力

◇口こそ出さねども、ニヤリとするスケベ心は男の生きる力、底力なんです。とても額縁には入りませぬね。

四月

多年草四月(一一六号)

傷だらけの天使逝って新元号

◇ショーケンの訃報に接する。やはり昭和の幕が下りることを知る。われら昭和世代その代表のひとりが荻原健一

だった気がします。

我ここにありと知らせる桜あり

◇咲き誇る桜の季節。何気ない木々の間に、あそこにも桜があったのかと気づかせる。自分もそんな存在になってみたい。

ゴミ議員捨てそこなって床腐る

◇滞貨処理だか、無理やり大臣になった人の失言が続く。滞貨というよりまさにゴミ。こんな議員に国政を委ねなければならぬ国民の悲劇。でも選んだのも国民。

題詠「線」

手のひらに生命線を描き足す

◇少しでも長生きしたいと手のひらに生命線を描きたしたくなる。それも老境にある人の微かな抵抗というわけです。

廃止線決まると増える利用客

◇一日の乗降客わずか数名というローカル線の無人駅がときどきNEWSになる。でも明日廃止となるとどこからともなく鉄チャンがカメラ片手に集まってきました。

スマホかえ慣れないLINEまだ不通

◇スマホを使うのはいいけれど使いきれない多機能。子供に設定してもらおう人も多いが、使っていた機能が余計なことをして使えなくなる悲劇もある。LINEは便利、でも

使えるようになるまでが結構大変。

五月

だんだん五月（六五号）

わがママが流儀羽織って闊歩する

◇だんだんわがママが板についてくる。それを流儀という勝手な言葉に置き換え、ふんぞり返って周りに迷惑をかけているのではないか。

白血病オリンピックを問い直す

◇期待の輝ける女子オリンピック候補者が突然の病の報告。金メダル金メダルとかまびすしかった世界に一石を投じたオリンピックよりも、金メダルよりも、病を克服して元気な姿をもう一度見せて欲しい。

見納めと覚悟の上で切るシャッター

◇写真を撮るときこれが遺影になるのかなと思うことが時折ある。だんだん何気なくカメラを人に向けられなくなる、向けられたくなるのは・・・

題詠「凸凹」

凸凹があって納得個性なら

◇人間の特性の凸凹を個性と呼ぶことができるのではないか。個性が豊かであることはそうした凸凹を愛でること

はないのか。

石垣を二人で積んで半世紀

◇城壁を見て感心する。さまざまな形の石を組み合わせ、流麗堅固な石垣を作る。結婚生活も二人でこうした作業を続けてきた結果なのではないか。

凸と凹合わせてやつと一人前

◇割れ鍋に綴じ蓋という言葉もある。夫婦も友達もお互いに相手のないものを補って成り立っていることもある。

多年草五月（一一七号）

三度目だ見合いの前に四股を踏む

◇今時お見合いは古いかも。合コンにすればよかった。スクワットでもいいけれど、お相撲の四股がまたいいね。

政治家が真摯の二文字摩耗さす

◇政治家の謝罪の記者会見。真摯に反省しを繰り返します、単なる居直りの言葉にしか聞こえませんが。疲れるな！

夢に見るスマホ手放す心地よさ

◇年がら年中スマホを片手の現代人。もし持たなかったらどんなに自由か。でも忘れた日は手帳と同じで地獄。すっかり一体化しています。

題詠「伸」

伸びしろがあると信じて五十年

◇若いうちの伸びしろはほめ言葉。お互いに相手の伸びしろを信じてつき合ってきたがやがて伸びしろはあきらめに転じていくのかな。

いつの間に伸縮自在面の皮

◇面の皮は厚いだけでなく、さまざまに変化していくものかもしれない。そういえば人格はペルゾナ（仮面）といえますね。

脇役は主役の陰で欠伸する

◇脇役に徹するという言葉がある。役者なんかは主役よりも脇役のほうがはるかに演技力もある場合もある。得てして主役は大根も多い。

六月

多年草六月（一一八号）

また負けたもうやめたでもまた見てる

◇ひいきの選手やチームの勝利を信じてチャンネルを回すのですが、無様な負けに、もう見ないなんて言う決別の言葉を投げつつも、また性懲りもなくなってしまうのがファンの心理なのでしょう。

引導をボケたふりしてやり過ぎず

結婚は人生賭けた大博打

◇お互いに希望に満ち溢れた結婚。昨今のように「できちゃった婚」だの「成田離婚」なんてなかった時代。それは人生の大博打。

幸せにするの言葉に賭けた妻

◇「君を一生幸せにするよ」求婚の決まり文句。それを信じて選んでくれた妻。だとすればそれに一生掛けて応えなくては。

来世は出会わぬ運に賭けてみる

◇君と出会ったのは奇跡、なんていうセリフの裏で、出会わなかったらどんな人生があったのだろう。つい皮肉な気持ちで読んだ句。